

1 作 物

項 目	作 業 内 容
(1) 早期・短期 水稻の管理	(今月の作業のポイント) ○早期・短期水稻の管理 ○普通期水稻の管理 ○大豆の管理 7月17日高松地方気象台発表の1か月予報では、向こう1か月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多い見込みである。 ア 水管理 早期・短期のコシヒカリ、あきたこまちは登熟期となる。この時期は間断かん水が基本であるが、田面を乾かし過ぎると品質が低下するため、湿潤気味の管理(飽水管理)に努める。再入水の目安は、田面の足跡に水が残っている状態である(写真1)。適度な土壌水分を保つことによって、根の健全化を図る。 落水を早めすぎると、葉での光合成能力が低下し籾の充実が不十分となり、くず米が多くなるので、落水時期は、収穫の5～7日前を目安とする。 イ 収穫適期 収穫始めの時期は、早期コシヒカリは最長稈黄変籾率75%、籾水分25～30%で出穂期後の積算温度900～1,050℃、出穂後日数33～37日頃である。短期あきたこまちは最長稈黄変籾率85%、籾水分25%、出穂期後の積算温度850～1,050℃、出穂後日数33～38日頃である。 ウ 乾燥・調製 この時期は温度、湿度が高く、品質が低下しやすいので、収穫後は速やかに乾燥する。乾燥温度は40℃以下、毎時乾燥速度(乾減率)は平均0.8%以下とし、過乾燥を防ぎ、仕上がり水分14.5～15%を目標とする。 早期・短期の水稻は収穫時の籾水分が高く、籾水分にばらつきが大きいので二段階乾燥(乾燥途中(水分18～22%)で休止し、一定時間(5～8時間)調質を行い再乾する)により、仕上が



写真1

飽水管理における再入水の目安

項 目	作 業 内 容											
(2) 普通期水 稲の管理	り水分のムラを少なくして過乾燥を防止し、胴割れの発生を少なくする。 籾摺前には機械の事前点検を行い、肌ズレ等の品質低下に注意する。											
	ア 穂肥 普通期水稲は、幼穂形成期から出穂期を迎える。穂肥は、ひめの凜、にこまるで出穂 20 日前（幼穂長 2 mm）を目安に実施する。ヒノヒカリは未熟粒が発生しやすいので、弱勢穎花の着生を抑えるため、出穂 18 日前（幼穂長 8 mm）に施肥を行う。施用量はいずれの品種も 10 a あたり窒素 4 kg、カリ 4 kg を基準とし、葉色により調整する。 なお、ひめの凜の出穂日の予想は次のとおり。											
	表 1 ひめの凜の移植時期と出穂予想日											
	<table><tr><td>移植時期</td><td>5/24</td><td>5/31</td><td>6/7</td><td>6/14</td><td>6/21</td></tr><tr><td>出穂予想日</td><td>8/21</td><td>8/23</td><td>8/26</td><td>8/28</td><td>9/1</td></tr></table> 農水研ほ場生育データ (R 4 ～ 6) から作成	移植時期	5/24	5/31	6/7	6/14	6/21	出穂予想日	8/21	8/23	8/26	8/28
移植時期	5/24	5/31	6/7	6/14	6/21							
出穂予想日	8/21	8/23	8/26	8/28	9/1							
(3) 大豆の管 理	イ 水管理と病虫害防除 この時期は水稲が最も水を必要とする時期であるため湛水管理とし、田面を乾燥させないように注意する。また、この時期は台風の接近・上陸が増える時期であるので、台風情報等に注意し、強風による高温・乾燥が予想される場合には品質と収量の低下を軽減させるために深水管理とし、強風が収まってから落水する。 なお、斑点米カメムシ類は畦畔での発生密度が高いので、ほ場周辺の雑草を出穂 15 日前までに除草する。											
	ア かん水 7 月上・中旬は種のフクユタカで 8 月中・下旬頃に開花期を迎える。大豆は水分要求量が高く、特に開花期以降は多量の水を必要とする。この時期の乾燥は花ぶるいや着莢不良による減収、青立ちによる収穫遅延を招く。そのため 7 ～ 10 日以上降雨がなく、最先端葉が立ち上がり反転して白く見えるような場合（写真 2）は、うね間かん水を行う。なお、高温時のかん水は根傷みを起こすので、朝夕に実施し、かん水後は速やかに落水する。											

項 目	作 業 内 容
	 写真2 うね間かん水の目安（左）と 葉の反転（右） イ 病虫害防除 ○ハスモンヨトウ 8月中旬以降、被害が拡大するので、白化葉（ふ化直後幼虫が群がって加害している被害葉）の早期発見と除去に努め、若齢幼虫期の防除を基本にする。また、薬剤感受性の低下を防止するため、同一系統の薬剤の連用は避け、ローテーション散布する。 ○カメムシ類 吸汁加害によって着莢が阻害され、減収や青立ちによる品質低下の要因となるため、ほ場周辺の除草に努めるとともに開花終期から子実肥大期にかけて2回程度防除を行う。 ○紫斑病 種子が侵されると紫斑が現れて品質が低下する。中山間地帯で発病しやすく、莢伸長期以降に降雨が多いと多発する。発生防止には開花後15～50日の間に1～3回防除を行う。ベンゾイミダゾール系薬剤（トップジンM剤、ベンレート剤）耐性菌が一部で確認されているので、系統の異なる薬剤をローテーションで使用する。

（作成 農林水産研究所）